The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ことばを越えて : Ilongotの悲しみ、台湾人の悲しみ
Author(s)	宮原, 曉
Citation	知の世界へのいざない : 君は外大をいかにいきるか. 2004, p. 31-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ことばを越えて

—*Ilongot*の悲しみ、台湾人の悲しみ—

宮原　暁

文化とことば

文化には、およそ３つの意味がある。第１に、文化は敬遠したくなる程洗練された思考や行動の様式、その結果生み出された芸術作品などである。第２に、それは、ヒトが生息するうえで、何らかのかたちで伝達され、共有される知識である。そして第３に文化は、「どこそこの文化」といったときの文化である。

第３の文化は、「異文化理解」といった標語や、何となく「違い」を強調したいときに持ち出され、その境界が自明であるかのように振舞う、博物館に陳列された「文化」である。

世間一般で文化人類学は、第３の「どこそこの文化」を研究するものだと思われている。しかし、人類学研究者の関心は、ごく当初から「人間とは何か」を探求することに向けられていた。比較と抽象化のレベルは様々であるにせよ、人類学研究者が第３の意味での文化に関心を持つのは、「人間は他者をどう認識するか」といった第２の文化にかかわる問題としてなのである。

言語は、このような文化の扉へと私たちを導くが、もとより文化そのものではない。確かに文化は、言語によって表現され、伝達される。しかし、文化はことばのなかに閉じ込められていはいない。言語と文化の間には、隠喩や文脈を生み出す認知のパタン、あるいは語学の習得という観点から言えば、文法と語彙を超えたものが、原子核をめぐる電子の軌道のように漂っている。

ここでは、「悲しみ」という、いささか社会科学では扱いにくいテーマが、どう言語と文化の間に記述し得るか展望してみよう。

*Ilongot*の「悲しみ」

タガログ語に lungkot という語がある。「悲しみ」とも訳されるこの語は、いったいどのような「悲しみ」を伝えようとしているのだろうか。

フィリピン・ルソン島シャラ・マドレ山脈に、かつて「首狩り族」として知られた *Ilongot* というプロト・マレー系の民族が暮らしている。*Ilongot* の知識と激情を主題としたミシェル・ロサルドの民族誌は、フィリピン諸島に居住する人々がある程度共有する「悲しみ」がいかなるものか垣間見させてくれる。

なぜ *Ilongot* は、首狩りをしてきたのだろうか。ロサルドによると、首狩りの直接の契機となるものは、近親者の死の悼みである。また首狩りは、若者が大人になるための通過儀礼としての意味も持っており、若者たちの迸る激情を、年長の男性が知識によってコントロールするということが象徴的に表現されている。

首狩りのプロセスは、大別して計画、往路の道程、攻撃、復路の道程、祝宴の五つの部分に分けられる。首狩りの攻撃目標、数、参加する若者と指導者が慎重に決定された後、一方は居住地を出発し、攻撃目標を待ち伏せる地点まで向かう。その間、とりわけ静粛さ、慎重さが求められ、歩行やその他の行動もゆっくりとなされる。また、塩や鰻など、獲物を取り逃がすことを意味するいくつかの食物がタブーとされ、鳥や蛇、蜂、ふくろうといった動物の動きに注意が払われる。

首狩りの攻撃そのものは、*amuluk*と呼ばれる混乱状態の中で行われる。首狩りの遂行は、攻撃目標の首を切り落とすことではなく、地面に投げ捨てられることで判断されるという。

首狩りを終えての帰路は、往路とは異なり、喧騒に支配される。このとき首狩りによって獲得された体の赤み、熱、そして生命力≒*liget*の集中を維持するため、湯を飲み、加熱したサトウキビを食べることである。一行が居住地に到着すると、祝宴が催され、服喪によって課せられてきた食物の禁忌が解除される。この首狩

りのプロセスを経て、若者たちは、結婚をすることができ、子孫をもうけ、自らの労働力の限りを家族のために振り向けることができるようになるのである。

*Ilongot*にとって首狩りのプロセスは、象徴的に中心と意味づけられる空間から周縁と意味づけられる空間に向かい、再び中心に回帰する旅でもある。

*Ilongot*は、彼ら・彼女らが居住する世界（森林、焼き畑地、住居）を中心と周縁に区別し、そのダイナミズムのなかに人の営みを解釈している。例えば、病いは、名を持たない霊や雑草が焼畑地の周縁で引き起こすのであり、同じ場に住む祖先の霊（名を持っている）は、稲の実りをもたらすのである。

中心と周縁の区分は、首狩りの前と後での若者と大人の*liget*の状態の違いを説明する。*Ilongot*は、若者の生命力を中心から周縁に放射状に伸びていくつる草に、大人の生命力を螺旋状に巻きつくつる草に喩える。若者の暴力的ですらある激情は、首狩りのプロセスを経ることで、周縁を取り込み、知識によってコントロールされた生命力となるのである。

こうしてみると、首狩りの旅が*Ilongot*の人生にとって本質的な意味を持つことは劇的ですらある。このような旅による生命力の獲得は、プロト・マレー系の*Ilongot*のみならず、フィリピンから日本にやってきた出稼ぎ労働者の旅にも見出すことができる。彼ら・彼女らが出稼ぎで獲得しようとするのは、お金だけではない。人生そのものを得ようと旅に出る。その途中で彼ら・彼女らは、首狩りにおいて*Ilongot*が持つ死の悼みと同じほど強い「悲しみ」がある。この「悲しみ」は、故郷から離れ、帰るべき土地を喪失した悲しみであり、憂鬱である。lungkotとは、このような旅の途中で吐露されることばなである。

台湾人の「悲しみ」

視点を第3の文化の問題へと移してみよう。帰るべき土地を失

う悲しみは、地球上そこかしこに溢れている。台湾人の「悲しみ」もその一つである。

台湾人は、清代以前から台湾に住む人々と、主に清代に中国大陸から移住した人々の子孫である。彼ら、彼女らは400年、あるいはそれ以上の年数、文化を伝達し、共有してきた。しかし、中国は、広大な市場と潜在的な経済力を背景に、この小さな島に住む人々を「中国人」として国際社会に認知させようとしている。

台湾人を悲しませるのは、独立の是非を問う国民投票への様々な干渉だけではない。外国人登録証の出身地の欄に自ら中国（台湾）と記載しなければならないこと。テレビのニュースに移される地図で、中国と台湾が同じ色に塗られるのを見ること。日本国政府の奨学金を、台湾からの留学生が受けることができないこと。これらはすべて台湾人の居場所を否定するものである。

「経済的な交流から始まって、いずれは統合する運命にあるのだから・・・」と識者は語る。しかし、運動会の万国旗に国旗がないことに気づいた子どもにそれをどう語ればよいのか。

台湾人がこの悲しみを克服するために、台湾人はその虚構性を国民国家のそれから、今福龍太の主張する「言語・民族・国家にたいする自明の帰属関係を解除」するクレオール主義のそれへとずらしていく必要がある（『増補版　クレオール主義』参照）。それは「日本人」という虚構、「中国人」という虚構に生きる人々にとっても同じことである。単一ではない複数の言語と文化の織り成す綾に身を委ねること、ここに、ことば、そして文化を越えることの、もう一つの意味があるのだ。

学生時代に読んだ一冊

Rosaldo,Michelle Z., *Knowledge and Passion: Ilongot Notions of Self and Social Life,* Cambridge University Press, 1980